

『学校文化の比較社会学』

志水宏吉著

東京大学出版会，2003年

この本は、私が、1980年代後半から15年ほどにわたって積み重ねてきた、日英両国における中等教育機関でのフィールドワークの成果を、比較社会学の視点から整理したものである。そのもとになっているのは、2001年に東京大学教育学研究科に提出した、私の博士論文（『日英学校文化の社会的探究—中学校とコンプリヘンシブ・スクールの比較から』）である。私にとっては2冊目の単著であるが、自分自身のこれまでの研究の歩みがぎっしり詰まっているという意味で、とりわけ愛着を感じる本である。

本書の主題は、わが国の中学校とイギリスのコンプリヘンシブ・スクールという2つの中等教育機関にみられる学校文化を、比較の観点から理解することにある。文化伝達機関としての学校は、それ自体がさまざまな文化的特徴を有する組織体・生活共同体であり、学校文化なるものは、さまざまに概念化することが可能である。本書では、「教師たちの教育活動とその背後にある教育の論理」を学校文化の中核をなす要素と位置づけ、わが国とイギリスの学校に見られる対照的な教育慣行・考え方の抽出を試みた。

本書の章立ては、以下のようになっている。

序章 学校文化への視座

第Ⅰ部 学校文化の構造

- 1 中学校とコンプリヘンシブ・スクールの成立と展開
- 2 南中学校—中学校の学校文化
- 3 リトルレイク・スクール—コンプリヘンシブ・スクールの学校文化

第Ⅱ部 学校文化の変容

- 4 マイノリティーグループと学校文化—システム内的要因による変化
- 5 教育改革と学校文化—システム外的要因による変化
- 6 「指導」7 の変容—中学校文化の歴史的变化

終章 学校文化の比較社会学に向けて

本書は2部構成をとっている。両国の学校文化の「構造」を捉えようとする第Ⅰ部と、その「変化」という相に迫ろうとする第Ⅱ部である。第Ⅰ部では、まず1章で、中学校とコンプリヘンシブ・スクールという2つの中等教育機関の成立と展開の過程を歴史的に跡づけることで、その制度的な共通性と相違点について考察した。続く2章と3章が、いわば本書のハイライトをなす部分で、中学校とコンプリヘンシブ・スクールの学校文化についてのエスノグラフィックな記述をそれぞれに提示した。第Ⅱ部では、「マイノ

リティーグループの存在」(4章)と「国家レベルでの教育改革の動向」(5章)という2つの要因が、どのように学校文化の変化を導いているのか、あるいは導いていないのかという問題について、考察を加えた。そして、続く6章では、わが国の中学校を対象をしぼって、中学校文化の中核をなすと思われる「指導」の論理の変容という切り口から、総括的な議論を試みた。

本書を出版して以降、痛切に感じるのは、一刻も早く、中学校とコンプリヘンシブ・スクールについての、次なるエスノグラフィーを生産する必要があるということである。本書に描かれているのは、あくまでも80年代後半から90年代末にかけての学校文化の諸相である。5章・6章で論じたように、90年代以降、両国では新自由主義的な教育改革の動きが顕著であり、その学校文化にも少なからぬ質的変容の波が押し寄せてきていると見なければならない。

かけだしの頃の私が模索した、学校を対象とする社会学的フィールドワークの手法は、より若い世代の研究者の間には、かなり一般的なものとして定着してきた観がある。しかしながら、そうした方法論的な洗練ないしは展開とはうらはらに、それによってもたらされたスクール・エスノグラフィーの蓄積は、いまだ微々たるものと言わねばならない。スケールの大きな、しかも時代のうねりを敏感に反映した、学校の事例研究が今求められている。

(志水宏吉)